鏝なみ〜ばいけん

石州左官の技

鏝絵めぐりの手引き

～石東地域編～

そのむかし
日本の時間は　ゆっくり流れていた
家や蔵をたのむ人　建てる人
最後の左官仕事になっても
ゆっくりは　変わらない
人・時間・雨・たばこ・会話…

そんな中から生まれた鏝絵
職人の心意気だけではいいつくせない
なにかが　そこにある

まちなみ探偵団

目次

Ⅰ　石州左官～日本の近代建築の一翼を担った職人たち～
1　石見の風土が育んだ「石州左官」…… 1
2　「石州左官」の足跡 …… 1
3　「石州左官」の技 …… 2
4　石州左官と鏝絵 …… 3
Ⅱ　鏝絵～今も残る石州左官の技～
1　鏝絵とは …… 4
2　島根の鏝絵～庶民がつくる世間遺産～ …… 4
Ⅲ　大田市周辺の鏝絵
・長福寺の「竹林に虎」と「龍」 …… 6
・蓮教寺の「龍」と「竹林に虎」 …… 7
・宮崎公園の「里山と海」 …… 8
・大田市駅前駐輪場の「石見の四季」 …… 9
・林家の「鐘馗（しょうき）」と「鳳凰（ほうおう）」 …… 10
・山根家の「鯉の滝登り」と「竹林に虎」 …… 11
・中田家の「竹林に虎」と「月にウサギ」 …… 12
・ふれあいの森公園のフレスコ画「花園にビー玉と戯れる昆虫」 …… 13
・西性寺の「鳳凰」「牡丹」「菊」 …… 14
・安養寺の「龍」 …… 15
・西往寺の「双龍」 …… 16
・西往寺の「安珍清姫（あんちんきよひめ）」「金毛九尾（きんもうきゅうび）の妖狐（ようこ）」 …… 17
・満行寺（馬路）の「天人」 …… 18
・高山会館の「名馬 池月」と琴ヶ浜会館の「琴姫伝説」 …… 19
・厳島神社の「龍」と「松に鷹」 …… 20
・厳島神社の「波ウサギ」と「牡丹に唐獅子」 …… 21
・三島家の「恵比須」 …… 22
・安田家の漆喰看板「大黒」 …… 23
・安楽寺の「龍」 …… 24
・渡辺家の「家紋に虎」、川島家の「松に鷹」 …… 25
・井沼田家の「牡丹に唐獅子」「五三の桐に蝶」「つがいの鶴」 …… 26
Ⅳ　鏝絵めぐりコースとマップ …… 27
Ⅴ　その他の石東地域の鏝絵 …… 29
Ⅵ　鏝絵の材料 …… 30
Ⅶ　鏝絵制作の手順 …… 31
Ⅷ　左官列伝 …… 32～35
Ⅸ　石州左官の魂を伝える職人たち …… 36・37
Ⅹ　他県の鏝絵の特徴と取り組み …… 38・39
鏝絵めぐりのお約束ごと …… 40

Ⅰ 石州左官 ―日本の近代建築の一翼を担った職人たち―

1 石見の風土が育んだ「石州左官」

大田市仁摩町　馬路の海・琴ヶ浜海岸

島根県は東西に約240kmと細長い地形で、島根半島の北方40～80kmの海上には隠岐諸島がある。宍道湖岸を西に向かい出雲平野を過ぎると、美しい海岸線を走る風景が一変、海岸まで山の稜線が迫り、かつて柿本人麻呂が「つのさはふ 石見の海の 言さへく 辛の崎なる 海石にぞ 深海松生ふる…」と詠った、岩山と白砂青松の続く海岸線が連なる「石見（いわみ）」へと続く。

石見地域は、山々が海岸線まで迫っており、大きな平野もなく、狭い耕地面積、小さな入り江しかないため、農業、漁業やその他の産業にとっても、生きていくことがきわめて厳しい地理的、経済的な環境であった。そんな「石見の国」の風土から生まれたのが「石州左官」と呼ばれる職人たちである。

そして、その名が広く知られるようになったのは、明治に入り石見銀山が下火になったのを機に、彼らが活躍の場を外に求めた頃と思われる。九州を始め大阪や東京、遠くは当時の朝鮮や満州が活躍の場となった。

2 「石州左官」の足跡

博多の商人神屋寿禎が発見して以来、最盛期には世界の産出量の３分の１を誇った日本銀の中で重要な位置を占めた石見銀山も、明治に入ると産出量の減少とともに衰退していった。銀の海上運搬や銀山関連の仕事を担っていた仁摩地域は、漁業や農業を主要な産業とするようになったが、漁業の近代化・大規模化にも乗り遅れ衰退を余儀なくされた。

「石州左官」を語るとき切り離せない仁摩の「馬路（まじ）職人」が生まれた背景がここにある。『仁摩町誌』には明治12年と大正10年の馬路村の職業別構成が次のように記されている。

（単位：世帯）

商業者業種／年	大工	左官	石工	漁業	船乗り	農業	その他	計
明治12年	54	34	31				86	205
大正10年	65	163	10	130	25	31	76	500

明治12年の記録では、商業者のうち左官16.6%、大工26.3%となっており、他の職種に比べ極めて多い。大正10年には、左官32.6%、大工13.0%と、左官が全職種の３分の１を占めるという高い従事率であった。

また、経済基盤が脆弱な地域であることから、地域での需要にも限界があり、生活のためには「出稼ぎ」が大きなウエイトを占めていた。石見銀山での大工仕事や船大工等の経験が、左官や大工の出稼ぎに活かされたことや、二男、三男対策としての職人選択の面もあったと考えられ、職種的に突出する結果につながったものと思われる。『馬路教育史』の「馬路と職人」の項には、「馬路

地区は背後が山地で農耕面積も少なく、これといった産業もなく、いきおい資本のいらない“腕”で食っていける技術を生かした、大工、左官として出て行くほか、生計の道がなかった」と記されている。

明治43年の出稼ぎ調査では、620人の出稼ぎ者がいて、朝鮮半島に180人、中国東北部に70人といったように、実に多くの職人が海外に出かけていった記録が残っている。大正５年末には、大工62人、左官153人が出稼ぎに出て、その活動範囲は関西以西、中国、九州を中心に幅広い。海外へは、朝鮮半島に大工14人、左官42人、中国東北部に大工２人、左官23人と、多くの職人が活躍の場を求め出かけていった。

真面目で、一生懸命働く石州生まれの職人たち。創意工夫を重ね新しい技術を取り入れて、多大な信用を勝ち取り、成功した職人たちも数多くいた。当時の活躍を示す逸話として、『馬路教育史』には「馬路農協の預金額数十億円」との記事もある。彼らの「腕」には家族の全生活がかかっており、給料日の馬路の郵便局には仕送りを待つ長蛇の列ができたというほど彼らへの期待は大きいものであった。

一見マイナス要素とも思える厳しい自然環境や社会環境の変化が、優秀な技術を持つ職人を生み、育んでいった。中でも、常に技術の錬磨と誠実な施工に心がけた左官たちは、尊敬の念を込め「石州左官」と呼ばれるようになった。

3 「石州左官」の技

「石州左官」は近代建築を支えてきたといっても過言ではない。

「石州左官」は、明治、大正、昭和の日本近代建築の多くに携わった。中でも大正９年の着工から竣工までに17年間を費やし日本建築界の最高技術が結集したと言われる「国会議事堂」、昭和の建造物として初めて国の重要文化財に指定（1997年）された「明治生命館」、松浦栄吉が関わった「大邱（テグ）郵便局」などにその技術をうかがい知ることができる。戦前の彼らの活躍を知る人の証言によれば、東宮御所、東京御所（現迎賓館）、帝国ホテルをはじめ、丸の内界隈のビル群のほとんどに携わったという。

国会議事堂中央広間天井の
ステンドグラス周辺（左）と石膏型抜き（右）

彼らは、仕事は教えてもらうのではなく、親方、先輩の仕事を見て、聞いて、体で覚えたという。現場においては、個人の腕の確かさに加えて、集団で一気に仕上げることが要求され、リーダーとしての素質も必要であった。そうした要素を兼ね備えた「石州左官」たちは、大手建設会社から高い評価を受け、高度成長期には霞ヶ関ビルや世界貿易センタービル、サンシャイン60などの建設にも携わり、日本近代建築の発展に大きく貢献してきた。

明治生命館ロビー

また、高い技術力は海を渡り多くの都市建設にも活かされた。中国の長春（チャンチュン）市には党委員会、省政府など戦前の建築物が残っており、現在も活用されている。先述の海外への出稼ぎの状況など考え合わせると、中国全土に石州左官の足跡が残されているかもしれない。

神戸の「異人館」群についても、外国の設計者のもとで、宮大工など日本人が建築に関わっており、室内のランプ掛けや壁など見事な装飾が施されている。これらにも「石州左官」が関わっていたに違いない。

馬路出身の松浦栄吉が関わった建造物

大邱　賴慶館

大邱郵便局

ソウルの建物

4 石州左官と鏝絵

『仁摩町誌』によると、国内外で活躍した「石州左官」たちは、一年の大半を出稼ぎに出ており、故郷に帰ってきた時の感慨はひとしおだったにちがいない。技術の上達に励み、「稼ぎ」と「腕」を持ち帰った左官の中には、こうした故郷への想いを込めて「鏝絵」と呼ばれる漆喰彫刻を施したものがいた。

民家の妻壁や戸袋には、施主への感謝の気持ちと家内安全などの祈りを込めて様々な「鏝絵」が施されている。また、職人同士の技の競い合いの場にもなったと言われている寺社にはその集大成とも言える見事な「鏝絵」が残っている。留守を預かる親や妻たちは、その鏝絵を見上げるたびに遠く離れた息子や夫を想い、さぞ頼もしく自慢に思ったことだろう。

長い歳月を経て、今もその風貌を残す「鏝絵」を見ていると、無事出稼ぎを終えた安堵や生まれ育ったふるさとへの感謝、そして「職人として一人前になった」という誇らしい気持ちがひしひしと感じられる。

知恵袋 その1　左官（さかん）－左官の名称と沿革－

宮中の修理には無位無官の職人では参入できないので、仮に木工寮の属（さかん）として出入りを許していたからそう呼ばれたとある。位は、大工棟梁、屋根職、鍛冶に次いで 4 番目。古くは壁を塗る人、塗り大工、泥工などと呼ばれていた。「左官」という文字をあてるようになったのは江戸時代になってからである。

左官工事は、 6 世紀半頃百済から仏教を中心とする進んだ文化が日本に入ってきて、仏教建築などが盛んに建てられるようになり急速に発達した。白堊（はくあ）上塗り（白壁）の技術も導入され、主に宮殿や上級貴族の邸宅などで行われた。法隆寺金堂の壁画下地などはその好例である。奈良時代には、朝廷に「土工司（つちのたくみのつかさ）」が設置され左官工事の材料や施工を管理していた。桃山時代に入り、軍事的機能と城主の権威の象徴として白堊塗り籠めの城郭建築が全国で始まり左官工事の需要が増大した。それまで糊材に高価な米粥が使われていたが、安く手に入る海草に変わり今日と同じ漆喰工法が完成した。

Ⅱ 鏝絵 ―今も残る石州左官の技―

1 鏝絵とは

入江長八

鏝絵は、鏝を使って様々な絵柄などの浮き彫りを施した漆喰彫塑。昔は漆喰細工、鏝細工などと呼ばれ、「伊豆の長八」こと入江長八（1815～1889）の漆喰彫刻を鏝絵という名称で呼んだのが始まりとされる。

漆喰装飾は、江戸時代後期、防火対策として幕府が塗り壁や瓦の使用の制限をゆるめ、土蔵造りなどを奨励したことから全国に広がっていった。明治に入ると、洋風建築が盛んになり、室内装飾をより豊かにするため、伝統的左官技術はより高度なものになっていった。

現存する鏝絵は、日本画の粋にも達するような極めて芸術性の高いものから、思わず微笑んでしまうようなものまで図柄や出来栄えも実に様々である。その地域の特色を放つ鏝絵たちは、大分県宇佐市安心院町、静岡県松崎町、富山県射水市、愛媛県南予地域をはじめ、全国各地で確認されている。

また、10年の時を経て全国に広がった鏝絵のネットワークは、岡山県や広島県の鏝絵調査を行う人材発掘のきっかけともなるとともに、石州左官の流れをくむ鳥取県とのつながりも深めている。

2 島根の鏝絵 ～庶民がつくる世間遺産～

(1) 鏝絵が語る隠岐・出雲そして石見

島根県では石見地域を中心として、寺社や民家等に現在300点を超える鏝絵を確認しており、その大半は明治の初めから昭和30年代にかけて制作されたものである。島根県内を隠岐、出雲、石見の３つの地域に分けて比較すると、鏝絵の図柄や分布数などに大きな偏りがみられる。

「恵比須」海士町（海士町菱浦）
制作者不明

隠岐地域では、現在、「恵比須」を１点確認しているのみである。取り付けられている土蔵は、海士町の玄関口、菱浦港のそばに明治10年に建てられたものだそうであるが、鏝絵の制作年代、制作者の詳細は不明である。鯛の赤色がきれいに残っており、髭を蓄えたハンサムな恵比須はなかなか魅力的な表情をしている。平成18年、土蔵の改修工事がされ、現在は海士町体験交流施設として活用されている。

「金袋」荒木家（雲南市大東町）
長瀬清五郎作

出雲地域も点数が少なく、確認できているものの大半が雲南地域（雲南市、奥出雲町）に集中している。図柄は「金袋」（巾着）がほとんどで、紐がぎゅっと絞られているもの、緩やかなものといった変化があるのが面白い。土蔵の正面には家紋、裏側に「金袋」が施されているのが特徴である。制作年代は古いもので明治中期。制作者は不明なものが多いが、長瀬清五郎、戸谷輝夫、江角理吉、稲田一郎といった４名の地元左官が確認できた。石見地域にも見られる図柄として「打ち出の小槌」、「鶴」を数点確認しているが、出雲市鷺浦の塩田家にある「鶴」は石州左官の作品と言われている。また、国の重要文化財に指定されている旧ＪＲ大社駅の駅舎天

井には見事な漆喰彫刻が施されている。

石見地域は隠岐、出雲地域に比べ、点数が圧倒的に多く、図柄の種類においても約40種類と多種多様である。さらに、石見地域を大田市、邑智郡の石東地域、江津市、浜田市の石央地域、益田市、鹿足郡の石西地域に分けてみると、それぞれの地域に特徴がある。

石東地域では約100点が確認されており、寺社に奉納されたものが多い。図柄も「龍」「鳳凰」「恵比須」「大黒」など多種多様で、精緻で技巧的な作品が多い。制作年代は、確認できるもっとも古いものとして、嘉永６（1853）年大田市仁摩町の宅野八幡宮に奉納された「橘」があり、続いて同町西往寺「龍」が明治18（1885）年となっている。

「橘」宅野八幡宮（大田市仁摩町）
制作者不明

「大黒」岡本家（浜田市金城町）
中尾作

「ライオン」安永家（吉賀町）
高田初造作

石央地域は約30点と少なく、特徴的な図柄は見あたらないが、どちらかといえば、益田地域の蔵飾りの流れに属すると考えられる。また、浜田市熱田町では、県道に沿って何点か見ることができ、かつての漁師町の繁栄が偲ばれる。制作者については、江津市桜江町大貫に川本町出身の荻原春市の作品が数点残っているほか、江津市桜江町川戸の太詔刀命（ふとのりとのみこと）神社の「龍」に三浦又次、浜田市真光町の真光寺に松尾甚一の名が確認できている。浜田市金城町の岡本家では５年前に蔵の修復が行われ、鏝絵もきちんとその姿を留めている。

石西地域は、多くの鏝絵が益田市横田町やその周辺に残されている。それは、伊藤末治の存在によるところが大きく、鏝絵の分布が末治の人間関係に重なることが興味深い。末治の系統は「鶴」「亀」などが多く、漆喰の白を多用しラインが美しいのが特長である。また、海岸部には末治とは別系統のものが残され、色漆喰を多用し、個性的な表情の「恵比須」「大黒」が多く見られる。吉賀町の「ライオン」や蔵飾りは、規模が大きく見応えがある。

（2）未来への技の伝承

日本の近代建築に大きな足跡を残す石州左官たちは、本書で紹介する数名を除けば、その名を残す者は少ない。また、急速な生活様式の変化や多様化する価値観に併せて進む過疎化、高齢化に伴って、庶民の財産とも言える鏝絵の多くは、老朽化する土蔵の運命とともに失われたり、建て替えなどによってその姿を消そうとしている。

こうした中、先人の優れた技術を後世に伝えるため、数名の左官職人によって、新たに鏝絵を制作する動きが出てきた。また、漆喰にこだわらず、他の壁材を用いるなど、現代ならではの工夫をこらして鏝絵を制作する職人も現れた。「鏝絵サミットインしまね」（平成17年秋開催）に併せて発行した絵本『どぞう』を活用し、時代を担う子どもたちに向けた漆喰体験の指導等も始まっている。

左官としての技術向上、所有者としての資産的価値の再認識、住民としての地域資源への気づきなど、それぞれの立場で鏝絵の未来を考えることが今こそ求められている。

土蔵のできるまでを分かりやすく解説している絵本『どぞう』
文・絵　村尾佳州子

Ⅲ 大田市周辺の鏝絵

「竹林に虎」

●長福寺の「竹林に虎」と「龍」

所 在 地	大田市波根町
所 有 者	長福寺
取付位置	経蔵入母屋切妻壁
制 作 年	明治
制 作 者	不明

「龍」

経蔵全景

460年前、尼子に破れて敗走する毛利元就が、出雲と石見の国境にある仙山峠を越えて波根東村にやっとたどり着き、小さな草庵に宿を求めたのが「寿智山（じゅちざん）長福寺」である。失意の底にあった元就は、開祖・三休上人に大いに励まされ、やがて銀山争奪に勝利し、中国地方の覇者に登り詰めていった。25年後、元就は71歳の時に再度この地を訪れている。その後、長福寺は上川内の谷奥から現在の場所に移転された。

鏝絵は、境内左側の二階建ての経蔵にあり、入母屋造り屋根の三角形の狭い壁に施されている。

本堂側にある「虎」は孟宗竹を背景に躍動感あふれる姿で彫刻され、迫力がある。獲物を狙う前かがみになった体勢に、動きと勢いを感じ、おもしろい構図である。また、でん部の張り具合がなんとも格好良い。

反対側の「龍」は、なぜか可愛らしく彫刻され、未だ成獣に達していないかのような、可憐な「龍」である。

先々代の住職の話では、制作年代は明治の頃らしく、制作者については不明である。近年、屋根替えと壁の塗り替えが行われた際、鏝絵の補修を頼んだところ、左官から「これは直さん方がええと言われた」という。

図柄の知恵袋 その1　虎（とら）

虎は、中国で四方の方角を司る「四神」の一つ。四神とは東方が青龍（川）、西方が白虎（大道）、南方が朱雀（くぼ地や沼地）、北方が玄武（丘陵）。後に、この四神に相応しい土地を理想的な地相と考えるようになり、日本の奈良、平安の都はこれに倣った。ライオン（獅子）が生息しない中国や東南アジアでは、虎が百獣の王。江戸後期の文政年間にコレラが大流行したとき、虎の頭骨を配合した丸薬に効能があったとか、あるいは小児の夜泣きに用いたと伝えられ、災いや魔物を寄せ付けない強い力の象徴とされることが多い。牝は母性本能が強いため、子供の健やかな成長を願って玩具にも登場する。

「龍」（中央）

●蓮教寺の「龍」と「竹林に虎」

所 在 地	大田市長久町
所 有 者	蓮教寺
取付位置	本堂正面
制 作 年	明治36年頃
制 作 者	森山 孫一

蓮教寺は、石見銀山百か寺の一つ。

初代石見銀山奉行大久保長安の後を受けた竹村丹後守（たけむらたんごのかみ）が江戸時代・慶長年間に創建。銀山の衰退で宝暦 4（1754）年に長久村中島（現・大田市長久町）に移転し、天保年間に同村川南へ移された。

その後、平成になって国道 9 号拡幅工事に伴い移築されたものである。鏝絵の移転作業は、壁ごと剥がして運び、以前と同じ正面入り口上部に取り付けられた。一部欠けていたところを左官が補修をし、ペンキで仕上げ修復された。

鏝絵は、幅 4 メートルの壁が束柱によって三つに仕切られ、左側は「竹林に虎」が、真ん中と右側には束柱をまたぐ形で「龍」が彫刻されている。

この作品は、近くに住む明治 6（1873）年生まれの左官職人森山孫一が30歳頃作ったもの。孫一は多いときで28人の弟子をつれて、主に土蔵づくりに東出雲町あたりまで出かけていたという。孫一の生家には、漆喰塗りのジャバラ天井が残されており、母屋の外壁や土蔵の窓回り、晩年を過ごした離れ内部の塗り壁などに彼の鏝捌きをみることができる。

「龍」（右側）

「竹林に虎」

本堂正面

図柄の知恵袋 その2　龍（りゅう）

龍は東洋の聖獣である。多くは水中に住み、天に昇り雲を起こし雨を降らす。火除け、家運隆昌のシンボル。古来龍は、三停九似の相を備えているという。三停とは、髪の生え際から眉までの間を上停といい、両眼から鼻の先端までが中停、人中より顎までを下停といい、それぞれ貴賤、寿天、貧富の相がこの三つに表れる。九似は、九種の動物の特長をすべて備えるという意味で、頭がラクダ・蛇の頂、鹿に角、鬼の目、牛の角、虎の掌、鷹の爪、大蛇の腹、鯉の鱗に似ているという。五本指は中国では皇帝の龍を、四本指は王侯貴族を表しているが、近世の龍は三本指が一般的とされる。そして片方の掌に宝珠を、尾には剣を持つ。

北側の里山の風景

●宮崎公園の「里山と海」

所 在 地	大田市大田町
所 有 者	大田市
取付位置	公衆トイレ内外壁
制 作 年	平成13年３月
制 作 者	品川　博

日本海を飛び跳ねるトビウオ

木の実を食べるリス

左：全体の印象に統一感を持たせている内部の装備
右：メルヘンタッチのトイレマーク

宮崎公園は、児童公園としての機能を備えたものにするということから、公衆トイレにも楽しい雰囲気を持たせる工夫がなされた。鏝絵は本来漆喰で様々な絵柄を浮き彫りするものであるが、ここではセメントを使って漆喰に勝るとも劣らない彫刻が施されている。

セメントは漆喰のように柔らかさを感じさせるものではないが、制作者の独特の色使いや鏝さばきにかかると、素材の堅さより作品そのものが先に印象づけられる。長年の努力の結果生み出された鮮やかな色は、左官アートの世界と言っても過言ではない。

建物全体はシンプルなデザインとなっていて、左官アート「品川ワールド」が思う存分に展開できるよう、窓が最小限に押さえられ壁面が多くなっている。広く取られた周囲の壁には、日本海を泳ぐ魚や三瓶山で遊ぶ昆虫たちの姿が本物そっくりに描かれている。鏝絵が存在感を発揮しながら建物の一部として壁から浮き出たようで、子どもはもちろん大人までも見るものを楽しませてくれる。

また、内部の通路壁面は黄みを帯びた土壁で塗り、むらを活かした文様がダイナミックな印象を与える一方、さりげなく取り付けられているトイレマークの可愛さに思わず微笑んでしまう。

鏝の動きが織りなす土壁の芸術

樹液に群がるカブト虫

夏の風景

●大田市駅前駐輪場の「石見の四季」

所 在 地	大田市大田町
所 有 者	大田市
取付位置	駐輪場内外壁
制 作 年	平成15年６月
制 作 者	品川　博・清志・福太郎

ＪＲ大田市駅前の駐輪場には、桜、朝顔、柿、椿といった季節の風物が散りばめられて、一年中石見の四季を一望できる空間が左官アート「品川ワールド」で展開されている。

駐輪場の内外壁の面積は約150平方メートルと広いため、制作は博さんに加え、兄・清志さんと息子・福太郎さんの３人で行われた。水彩画でいえば画用紙にあたる壁面が、「下地調整」「下塗り」「中塗り」「上塗り」と段取りよく塗り重ねられていった。この壁は品川さんが長年培ってきた材料に工夫があり、ひび割れが少なく環境に順応しやすいモルタル壁である。

品川仕様の色モルタルを盛り上げるには、清志さん特製の大小数十種類の鏝が欠かせない。清志さんは、ステンレスのはぎれ材から、スプーンや釣針など何でも作る名人である。

桜の花びらの鏝使いを例に取ると、いかに細やかな技が潜んでいるかがよく分かる。掌に入るほどの小さな鏝を使って、まず一枚の花びらを作るのに２回、これを５回繰り返すことにより、一つの桜の花びらになる。満開の桜には職人の汗と心がこもっている。

内部の壁面は綿々と連なる中国山地を思わせる山なみが、うっすらと霞がかかったような手法で施され、梁の上の猫やネズミなどのセメント彫刻群とともに、行き交う人々の心を和ませてくれる。

冬：椿の花々に舞う天使

春：繊細な鏝使いの桜の花

夏：朝顔に水をやる天使たち

桜の花びらを作る時に使う鏝

梁でうたた寝する猫

秋：甘い香りの漂いそうな柿

「鍾馗」

●林家の「鐘馗（しょうき）」と「鳳凰（ほうおう）」

所 在 地　邑智郡美郷町粕渕
所 有 者　林 家
取付位置　土蔵妻壁
制 作 年　明治３年頃
制 作 者　宅野の左官

「鳳凰」

土蔵全景

林家の母屋は、緩い階段を上ったところに建っているが、通りに面して建っている土蔵の両側の妻壁に鏝絵がある。

二つの鏝絵はいずれも直径60センチほどの蔵飾りである。

粕渕村長を務めたこともある初代の林久右衛門は、醤油醸造を興こし、佐渡屋という先祖の屋号から「分（ヤマサ）」という商標で「八つ橋」「萩の露」の二つの銘柄を大正の頃まで生産していた。

現在の当主・諄さんは、「商家で繁盛するようにという願いを込めて、初代が土蔵に彫刻したのではないか。」と話してくださった。

正面の妻壁には「鳳凰」が彫られているが、妻・好子さんは「鳳凰というより極楽鳥みたいですね。」と語る。

裏側の妻壁には、「鍾馗」が疫病神を押さえつけている場面が描かれ、制作当初は鮮やかな色彩とリアルな表情で迫ってきたに違いない。長い年月を経て色あせ、どこか優しい表情に変わっている。

「鍾馗」を見るためには、天井の大きな梁組や煙出しのある大きな土間を通らなければならないが、帳場の大福帳などを見てもかつての商いの隆盛ぶりが伺える。

また、この通りにある隣家の堀尾家には、品川博さんが平成13（2001）年６月に制作した「龍」がある。

図柄の知恵袋 その3　鍾馗（しょうき）

唐の玄宗皇帝が夢に見て描かせたのが始まりとされている。魔を除き疫病の悪神を追い払う神。ひげをたくわえ黒冠をつけ、軍靴を履いて片手に剣を持つ強者で、五月人形などに描かれる。

「鯉の滝登り」

●山根家の「鯉の滝登り」と「竹林に虎」

所 在 地　邑智郡美郷町惣森
所 有 者　山根 家
取付位置　離れ 2 階戸袋
制 作 年　昭和 6 年
制 作 者　荻原 春市

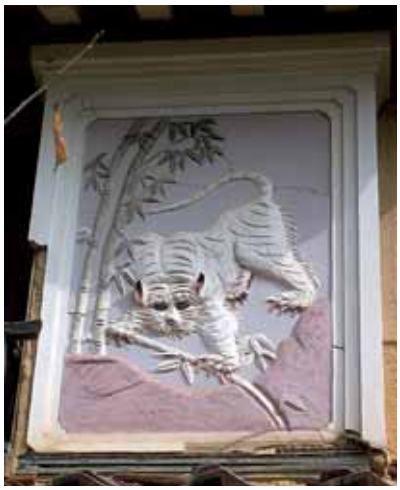
美郷町惣森の県道から谷川に沿って登ること約10分、かつては田畑だったところに草木が生い茂り、イノシシがわが物顔で荒らし回っている跡が目に付く。突然視界が開ける山の中腹に一軒の民家・山根家が見えてくる。高齢で一人暮らしとなった所有者が、生活の不便さから家を離れ空き家となってから老朽化が急速に進んでいる。

鏝絵は、母屋に並ぶ土蔵風の洒落た離れの 2 階戸袋にある。西向きには「竹林に虎」、北向きには「鯉の滝登り」。他にも妻壁の鶴や紅葉などの装飾が施され、左官の余技とは思えない出来栄えである。

川本町出身の左官・荻原春市が「材料を出してもらえば記念に残しておきます」と言って、昭和 6（1931）年、離れの完成にあわせて制作したという。この鏝絵に出会った当時の当主・千和世さんは、「私が若いころは色が鮮やかでそれはもう見事でした」と回想した。かつては道も通っていて、見学者も絶えなかったらしい。

平成 8 年晩秋の夕暮れ、ここを訪れた作家・荒俣宏さんは、枯れススキの向こうの十三夜の月を見ながら「鏝絵見て 恋しかるべき 秋はこぬ」と詠んだ。さらに「妖怪巡礼団が、風流を楽しんじゃ、サマにならないね」と笑いながら話された。作家・荒俣宏さんが“恋”した鏝絵である。

現在、傷みの進んだ建物から鏝絵を救うために地元工務店主を中心に保存に向けた動きが始まっている。


「竹林に虎」

客殿の鏝絵を見上げる見学者

図柄の知恵袋 その4　鯉の滝登り（こいのたきのぼり）

支那大陸を流れる黄河はその源を崑崙（こんろん）山脈の奥の積石山を経て、竜門という流れの急な渓谷に至る。竜門を見事、登り切った鯉は龍になるといわれる伝説から、鯉が人間の立身出世にもたとえられるようになった。日本では、室町時代の武家が川魚の長と呼ばれる鯉の勇ましさを好んだと言われている。

「竹林に虎」

●中田家の「竹林に虎」と「月にウサギ」

所 在 地	大田市水上町
所 有 者	中田 家
取付位置	客殿 2 階壁
制 作 年	昭和 8 年
制 作 者	荻原 春市

「月にウサギ」

中田家遠景

中田家のある大田市水上町は、大森町に隣接し、銀を上納するための輸送経路となっていた。また、石州瓦の産地として有名である。中田家もその昔瓦を焼いていたという。

山を背にして、納屋、主屋、客殿、蔵が建ち並び、客殿の 2 階の両端の壁に鏝絵が見える。向かって左側が猫のような「竹林に虎」、右側には「月にウサギ」がかわいらしく施されている。祖父母の干支にちなんで作ったそうである。「竹林に虎」は荻原春市が美郷町惣森の山根家と同じ構図で作ったものであり、比べてみるとおもしろい。

なぜか、祖母の「虎」が大きく、祖父の「ウサギ」が小さい。当主・俊光さんは「夫婦の力関係が働いたわけでもないでしょうがねぇ。」と笑顔で語られるが、絵柄のバランスを考えるとやむを得ないと思われる。

手入れの行き届いた庭で鏝絵を見学しながら、中田さん夫妻のもてなしを受け、かつて職人たちが心意気で鏝絵を作ったときと同じ人情に触れることのできる貴重なスポットでもある。

図柄の知恵袋 その5　月にウサギ（つきにうさぎ）

月にウサギがいるというのは仏教説話に次のような話が残っている。

「今は昔、天竺において、兎・狐・猿の三匹の獣が菩薩の道を修行していた。三獣の信心を試そうと老翁に姿を変えた帝釈天に、兎は他の獣のように捧げものが出来ないので焚き火に我が身を投じて、それを食べて貰おうとした。その時、帝釈天はもとの姿に戻って、この兎が火の中に飛び込んだ姿を月の中に移し、あまねく一切の衆生に見せるために、月の中にとどめ置かれた。」

ふれあいの森公園全景

●ふれあいの森公園のフレスコ画「花園にビー玉と戯れる昆虫」

所 在 地	大田市大森町
所 有 者	大田市
取付位置	トイレ 2 階外壁
制 作 年	平成 9 年12月
制 作 者	梅林 潤子

大田市大森町にある「ふれあいの森」公園の公衆トイレで、フレスコ画の上塗り絵付け作業に入ったのは平成 9 年12月だった。寒風や吹雪をついての作業もあったが、なんとか正月前に完成することができた。

制作者は、当時松山市在住で25歳の画家・梅林潤子さん（故人）である。

フレスコ画は、鏝絵と同じように消石灰を使うが、それも湿式の消石灰を使用する。梅林さんから「3 か月以上寝かせたものを使いたい。」と言われ、20キログラム入り生石灰 8 袋を仕入れ湿式消石灰を用意した。

フレスコ画は下塗りの石灰モルタル（消石灰＋砂）を10ミリ塗った上の 6 ミリ厚の上塗り面に描くが、経験不足から下塗り壁にひび割れが生じ、全て剥がしてやり直すという一幕もあった。

絵は上塗りの壁面が生乾きの約 6 時間が勝負である。自分が描ける範囲しか塗れない時間との戦いでもある。また、色は乾くにつれ微妙に変化する。その変化を計算に入れて描かなくてはならない。その辺りの妙味がおもしろいと梅林さんは語った。

大森の古い町並みでの 3 か月の滞在が芸術家としての創作意欲をかき立て、延べ幅17メートル、高さ1.1メートルの折れ曲がった 2 階腰壁に描かれた「花園にビー玉と戯れる昆虫」は、新しい風や土を感じることのできる空間を創造した。

昆虫とビー玉

花とビー玉

蝶とビー玉

トンボ

知恵袋 その2　フレスコ画（ふれすこが）

フレスコとはイタリア語で「新鮮な」の意。壁画制作の手法の一つ。漆喰（しっくい）壁が乾ききらないうちに顔料を水に溶いて描くもの。壁が乾くとともに顔料が定着し、堅牢なものとなる。

フレスコ画として有名なものには、バチカン市国のシスティーナ礼拝堂にあるミケランジェロが描いた「天地創造」、「最後の審判」、ローマ時代に作られたポンペイの遺跡などがある。また、中国の仏教遺跡や日本の古墳遺跡でもその手法が見られる。

●西性寺の「鳳凰」「牡丹」「菊」

所 在 地	大田市大森町
所 有 者	西性寺
取付位置	経蔵
制 作 年	大正 8 年頃
制 作 者	松浦 栄吉

「牡丹」

「菊」

経蔵全景

町並みの中ほどにある西性寺は、寛正 6（1465）年創建の浄土真宗（本願寺派）の寺院で、現在の本堂は弘化 2（1845）年に再建された。創建時は天台宗龍泉院と号したが、開基善徳が浄土真宗に改宗、後に西善寺と合併し西善坊となり、大永 4（1524）年住職宗徳の代に西性寺に改名された。

銀鉱脈の発見以来、約600年の栄枯盛衰のドラマを演じてきた石見銀山も終焉を迎えようとする明治の後半、大森の町は銅の産出量の増大から、「夢よ再び」の好景気に沸いていた。

大正中頃、己の人生を賭けるかのように懸命に鏝を握る一人の左官・松浦栄吉は、当時「左官の神様」と呼ばれていた。西性寺の門徒であった栄吉が同寺経蔵に鏝絵を施したのは還暦を迎える頃だった。

正面の壁には蒼空に羽ばたく「鳳凰」のダイナミックな姿が彫刻され、羽の端にはガラス玉が埋め込まれて制作当時はキラキラとまばゆいばかりであったという。他の 3 面には大輪の「牡丹」や「菊」の生命力あふれる瞬間が彫られており、図柄の構成や浮き彫りの技法など、余技とはいえまさに経蔵全体が栄吉の左官人生を集大成した作品のようだ。

図柄の知恵袋 その6　鳳凰（ほうおう）

吉兆をもたらす神鳥中の神鳥で、その霊気の高さから鳥王と呼ばれている。鳳凰が観られるのは大変な瑞兆であり、君子と民の心の通じ合った徳の高い国か、乱世が治まり天下に平和が戻った知らせとして東方より太陽の光に乗って飛んで来るという。鳳凰が飛ぶ時はすべての自然が鳳凰を祝福し、風が止まり塵さえ飛ばず、その他の鳥虫も鳴くことはない。翼のはためく音はさながら笛の音のようだという。エジプトではフェニックスと呼ばれ、不死永生の象徴とされている。

●安養寺の「龍」

所 在 地	大田市大森町
所 有 者	安養寺
取付位置	経蔵
制 作 年	明治
制 作 者	不明

江戸中期に書かれた「石見国銀山旧記」には、当時のにぎわいぶりを「人数二十万人、一日米穀を費やすこと千五百石余、車馬の往来昼夜を問わず家は家の上に建て軒は軒の下に連なる……、家数二万六千余、寺百ヶ寺」と記されている。

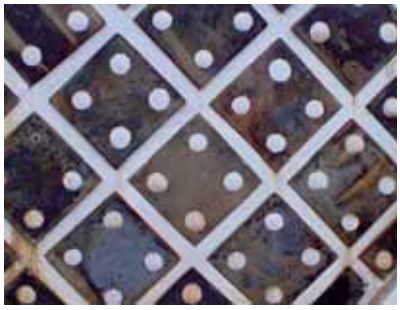
安養寺は、銀山旧記が記したかつてのにぎわいの中に位置する。元は仙ノ山にあって江戸時代中頃に現在地の谷あいに降りてきたと伝えられている。倒れかかった本堂を平成13（2001）年に修理した。刻まれた幾つかの寛政年間の年号から、200年以上は経つと思われる。

鏝絵は本堂の脇に建つ経蔵の正面の扉の上にある。緑色の体色に口ひげを長く伸ばした「龍」である。現在、経蔵の解体修理が行われており、地盤の整備、土台や軸組の組み立てなどが行われ、平成19年３月に完成した。これに併せて鏝絵も取り外されたが、改修された土蔵に元通りに取り付けられることになっており、再び「龍」を見上げることができる。

また、安養寺の経蔵にはもう１つの左官技を見ることができる。なまこ壁といわれる民家や蔵などの外壁の様式で、明治から昭和初期にかけ全国各地で見受けられた。温泉津の町並みでもなまこ壁の民家や蔵を見ることができる。

経蔵全景

修復された「龍」



安養寺のなまこ壁

知恵袋 その3　なまこ壁（なまこかべ）

壁面に四角い平瓦を並べて張り、格子になった目地（継ぎ目）を漆喰（しっくい）でかまぼこ型に盛り上げたもので、民家や土蔵の外壁に使われる。その盛りあがった形が海鼠（なまこ）に似ているところからその名がついたと伝えられている。また、江戸時代に防火・防湿建築として普及したと言われている。

温泉津町のなまこ壁

●西往寺の「双龍」

所 在 地　大田市仁摩町
所 有 者　西往寺
取付位置　本堂正面
制 作 年　明治18年
制 作 者　安田 鹿市　児島 嘉六

雄の「龍」

雌の「龍」

本堂正面

石見の鏝絵は、絵柄が豊富で40種を超える。数としては「龍」が最も多く、なかでも西往寺の「双龍」は、見ごたえのある作品の一つである。

西往寺は、石見銀山を源とする潮川の河口、港近くの町並みにある。十数段の石段を上がって境内に入ると、本堂の小壁の間口４間いっぱいに、向かって真ん中は雌雄の「双龍」、左右には「金毛九尾の妖狐（きんもうきゅうびのようこ）」と「安珍清姫（あんちんきよひめ）」の３作品が彫刻されている。

中央の「双龍」は、幅3.8メートル、高さ1.2メートルの大きさで、漆喰塗の額縁のなかに納められている。青い背景が今も鮮やかで、細部まで工夫が凝らされ、見る角度まで考慮に入れた鏝さばきには感嘆する。神聖な感じを抱かせる作品だ。

作品の両脇の柱に打ち付けられた短冊状の杉板には、二人の左官職人の名前と制作年代が墨書されている。向かって左側には師匠格の安田鹿市、右手には兒島嘉六の名前がある。年代はいずれも明治18（1885）年、奉納とあった。

作者・安田鹿市の姪にあたる人からの情報によると、同町安田家の長男に生まれた鹿市は、鳥取県へ年中仕事に出かけ当地で結婚した。「双龍」は、左官になって６年目の時、西往寺に足を運んで作ったという。また、嘉六は、この作品に18歳で関わっている。

図柄の知恵袋 その7　双龍（そうりゅう）

双龍は陰陽効果で龍のエネルギーが最高となり、森羅万象（宇宙に存在する一切のもの。あらゆる事物・現象）を調和し、運気を上昇させ、願いをかなえ、様々な幸運をもたらしてくれるといわれている。

●西往寺の「安珍清姫（あんちんきよひめ）」

所 在 地　大田市仁摩町
所 有 者　西往寺
取付位置　本堂正面
制 作 年　明治36年
制 作 者　安田 伊三郎

「安珍清姫」の作品は、説話や歌舞伎などで知られる「娘道成寺」のクライマックスシーン、旅の僧安珍に裏切られた清姫が憤怒の果てに蛇身に変じ鐘の中に隠れた安珍を鐘ごと愛欲と恨みの炎で焼き尽くす、壮絶な場面を再現している。

この鏝絵に出会ってしばらくして蛇身の尻尾の一部が崩れ落ちた。調べてみると叩いた藁を一定の太さに束ねて針金で縛りその周りを泥土で形を整え、漆喰で上塗りがなされていた。その泥土や漆喰には、スサ（わら・麻・紙などを細かく切った材料）がよく混ぜてあって繊維質のようになっていた。鏝絵が長持ちしそうな丁寧な仕上げである。

背景には、「明治三十六年十月吉日」「奉寄進」という文字と「安田伊三郎」という左官の名前が見える。

実はこの伊三郎は、安田鹿市の末の弟で兄の鹿市が「龍」を造ったというので「わしも造る」といって挑戦したという。このときまだ24歳。作品への執念を感じ鬼気迫るものがある。伊三郎は、残念ながら28歳の若さで四国で亡くなっている。この天賦の才になぜ長寿を与えなかったのか惜しい。

●西往寺の「金毛九尾の妖狐（きんもうきゅうびのようこ）」

制 作 年　明治36年
制 作 者　安田 伊三郎

「金毛九尾の妖狐」も伊三郎の作品とされる。この妖狐は鳥羽天皇の寵姫玉藻の前に化け多くの人を害したが、正体を見破られて下野国那須野原で射殺され石にされる。後に、通りかかった玄翁和尚が法力と共に鉄槌によって石を砕き成仏させる。「御伽草子」の中のお話で、和尚に別れを告げ昇天していく狐の表情が印象的だ。

ちなみに大きな鉄槌を「玄能」というのはこのときの逸話から始まったものらしい。

●満行寺（馬路）の「天人」

所 在 地	大田市仁摩町馬路
所 有 者	満行寺
取付位置	本堂入母屋切妻壁
制 作 年	平成９年10月
制 作 者	松浦 満幸

全景

「天人」の試作

満行寺は馬路の集落と日本海の海原が眼下に見渡せる所にあり、囲碁四世本因坊となった道策の顕彰碑が建っている。

馬路の左官・松浦満幸さんを中心とした地元の若い衆は、松浦栄吉や井沼田助四郎など、近代建築の礎を担った職人が残した左官アートを、今に蘇らせようと立ち上がり、大分県宇佐市安心院町や静岡県松崎町へ出かけた。視察後、早速自分たちで作品を作り、地域の文化祭などで発表した。

折りしも、満行寺の屋根替えが行われることになり、工事に併せて鏝絵を寄贈することになった。本堂の妻壁に直接施された「天人」の図柄は、先代住職の石水真二さんが本でヒントを得たものらしい。

制作は下絵を描くことから始まった。現場では、原寸の四分の一程度の大きさの模型を作り、色や見上げたときの形、色漆喰の作り方などについて検討した。５色の顔料から10色の色漆喰を調合。銅線や板に麻縄を巻き付け「天人」の芯を作り、砂漆喰で形を整え最後に色漆喰を塗って仕上げた。

作業は屋根替えが終わった平成９年７月から始まり、一日の仕事を終えた夕方や土曜・日曜を使って、10月初めに完成した。

現代の左官にとっては初めての経験でわからないことが多く試行錯誤の作業で、特に目の向きを描くのに苦労したという。

図柄の知恵袋 その8　天人（てんにん）

天上界に住む者。あらゆる迷いを捨てきってはいないが、苦の少なく、喜びの多い境遇にある。音楽を奏し、天華を降らせ、瓔珞（ようらく）をなびかせて虚空を飛行（ひぎょう）するとされる。

●高山会館の「名馬 池月」

所 在 地	大田市仁摩町馬路
所 有 者	高山会館
取付位置	2 階壁
制 作 年	平成14年 6 月
制 作 者	松浦 満幸

源頼朝の持ち馬であった「名馬池月」は、後に家臣の佐々木高綱に下げ渡され、「宇治川の合戦」（1184年）で木曽義仲との戦いに臨んだ高綱は、激流逆巻く中をものともしない池月の働きで先陣をきることができた。

全国にはいくつかの「名馬池月」にまつわる伝説があるが、高山会館の外壁に取り付けられた「池月」は、若駒の池月が駆け抜け、月光のもと、海面に映るわが身に別れた母の姿を思い浮かべたというものである。

平成17年11月に開催した「全国鏝絵サミットインしまね」などで展示され、現在は松浦さんのアトリエとなっている高山会館の中に置かれている。このアトリエでは、仕事の合間に鏝絵制作を行うほか、地域の子どもたちを対象とした教室で鏝絵の指導もしている。

●琴ヶ浜会館の「琴姫伝説」

所 有 者	琴ヶ浜会館
取付位置	2 階外壁
制 作 年	平成15年11月
制 作 者	松浦 満幸

琴ケ浜会館の壁面に取り付けられた鏝絵は、この浜に伝わる「琴姫伝説」である。壇ノ浦の戦に敗れ、この地に流れ着き、村人に助けられたお礼に毎日琴を奏でていた平家の姫が亡くなって以来、浜の砂が琴の音のように鳴くようになったというもので、浜の中央には琴姫の碑が建てられている。松浦さんは構図を決めるのに悩んだようだ。背景は明治の初めにこの地を訪れた画家玉堂が残した絵を、琴姫は宮中に仕えた女官という設定で、十二単の紫式部の絵を参考にして描くことにした。肝心の顔は自分の好みが働いたようで、よく言われるところの瓜実顔ではなく現代的である。

この鏝絵は大作で、やり直しもあり10か月ほどかかった。

●厳島神社の「龍」

所 在 地　大田市温泉津町
所 有 者　厳島神社
取付位置　拝殿
制 作 年　明治34年３月
制 作 者　温泉川 清二郎　三島 伊作

ＪＲ温泉津駅近くにある厳島神社は、永禄11（1568）年に毛利元就が尼子義久を滅ぼした後、建立したと言われる神社で、境内にはその昔、素盞嗚尊（すさのおのみこと）が旅の衣を替えたと伝えられる衣かけ岩が残っている。

温泉津の鏝絵は、温泉街に至るまでの小浜地区に多く残っているが、厳島神社の拝殿には、北前船の絵馬などとともに５つの鏝絵が飾られている。

ふたつある「龍」は何れも幅２メートルほどの迫力ある大作だ。青い背景の「龍」は、いつ頃、誰の制作であるか不明だが、足や胴の一部がはがれ落ち、下地の板に下書きされた跡が見える。

黄土を背景に使った「龍」は絵の中に「奉進」「明治三十四丑三月吉日」の文字が刻まれ、年代が分かる。職人も「温泉川清二郎　三島伊作　作」と二人の名があり、二人ともこの町出身の左官である。

石見の鏝絵はその半数近くが寺社に奉納されているのが特徴である。奉納といっても、寺社の壁などに直接彫刻されるものや厳島神社のように扁額（へんがく）にして奉納されるケースもある。

「龍」（制作年・制作者不明）

●厳島神社の「松に鷹」

制 作 年　明治34年３月
制 作 者　清太郎

この作品は、短冊をくわえた鷹が松の幹の下で舞う構図で、短冊には「大勝利」の文字が読み取れる。何を祈り、また祝ったのであろうか。背景には「三十四年三月」と「清太郎」の浮き彫りの文字が見え、年代の部分がはがれ落ちているが明治の頃と思われる。

図柄の知恵袋 その9　松に鷹（まつにたか）

松は四季を通じて枯れることなく緑をたたえる樹木であり、永遠の繁栄を象徴している。また、描かれている大鷹は威嚇的で攻撃的な姿勢。権力の象徴を意味するものであると考えられる。

●厳島神社の「波ウサギ」

所 在 地　大田市温泉津町
所 有 者　厳島神社
取付位置　拝殿
制 作 年　大正７年８月
制 作 者　三島 健治

拝殿の正面の梁の上に飾られているのが、小浜に生まれた左官三島健治が奉納した「波ウサギ」である。

この鏝絵は、にぎやかで楽しい。左官が楽しみながら自在に鏝をふるったように感じる。波間に跳ねるウサギだけでなく、鳥を２羽飛ばしてみたり、月で餅つくウサギをかわいらしく描いたり…。「奉納　大正七年八月吉日」という年代を入れ、極め付きは自画像まで描いている。さらに、その印半纏の襟に「ミシマ　ケンジ」の名前をいれる念の入れようで、なかなかユーモアのある粋な左官であったようである。

また、「波ウサギ」が作られたこの年に、健治の生家の向かいに、木造３階建ての「小浜温泉旅館」が建った。擬洋風の偉容を誇ったこの建物の正面に天女が舞う姿を彫刻した。人の背丈の高さで建物の幅ほどあったらしい。残念ながら、小浜温泉旅館は昭和30年に焼失したが、「波ウサギ」はその記念として厳島神社に奉納したものである。

●厳島神社の「牡丹に唐獅子」

制 作 年　不明
制 作 者　山本 栄吉

この作品は、下部に岩を配し、左に大輪の牡丹、右に逆立ちして牡丹を見つめる唐獅子を彫刻してある。むだのない鏝運びで、唐獅子の表情などがうまく表現されている。

図柄の知恵袋 その10　牡丹に唐獅子（ぼたんにからじし）

唐獅子と牡丹の組合せの由来は、 百獣の王と呼ばれている獅子と百花の王と呼ばれている牡丹、 つまり猛獣と草花の王を並べたことによって生まれた図柄。獅子は仏・菩薩の三昧耶形（誓願を象徴するもの）で、牡丹を愛しこれを食したという伝説がある。山車（だし）の彫刻や能などにもよく用いられ、あらゆる場面で勇ましさと華やかさを演出している。

●三島家の「恵比須」

所 在 地　大田市温泉津町
所 有 者　三島 家
取付位置　3 階正面壁
制 作 年　大正
制 作 者　三島 健治

バラの花をあしらったタイル

3 階建ての建物が三島家

温泉津の厳島神社に「波ウサギ」の鏝絵を奉納した左官・三島健治の生家は、同じ小浜町内で駅前通りを少し海寄りに行ったところにある。

三島家は、駅前通りに面しており、代々旅館を営んでいた。現在、 3 階建てであるが後に増築されたものだ。ちなみに、木造 3 階建ては旅館が多いのだが、温泉津には 7 軒ほど残っており、県内で最も集中している。

8 代目となる健治は手先が器用だったので、家業を継がずに左官職人の道を選んだ。三島伊作は健治の甥にあたる。

健治は、生家の 3 階壁面に温泉旅館の偉容を見守るような「恵比須」を彫った。大きな鯛を抱え、笑みを浮かべた表情豊かな恵比須顔をうまく彫刻している。今はすすけて往来を行き交う人は見落とすかも知れない。また、「恵比須」の下方には、白地に青緑のコントラストが美しいタイルが貼られており、よく見ると白いバラの花があしらわれている。向かって右側には「大黒」があって一対だったらしい。

当時、 3 階建て温泉旅館を建てたのは大正 7（1918）年の鉄道開通が大きなきっかけだった。沿線には次々と旅館が建ち並び、生家の増築もそうした時期だ。健治は生まれ育った町が変わる時、左官職人として大きく貢献した。

図柄の知恵袋 その11　恵比須（えびす）

烏帽子姿で釣り竿と鯛を抱えての姿がおなじみの恵比須神は、伊邪那岐命（いざなぎのみこと）と伊邪那美命（いざなみのみこと）との間に生まれた子、足が立たない骨なし蛭（ひる）の子といわれ船で海に流される。それがいつの間にか、異国から海の幸をもたらす神となり猟師に信仰されるようになる。また商業の神ともされ商人に商売繁盛としても信仰される。

●安田家の漆喰看板「大黒」

所 在 地　大田市温泉津町
所 有 者　安田 家
取付位置　2階正面壁
制 作 年　大正
制 作 者　三島 健治

大正7年の温泉津駅開通が小浜の町を大きく変え、このとき鏝絵が一層の彩りを添えた。周辺の路地には、明治から大正の家並みが今も残っている。

「開春」蔵元・若林酒造近くの安田家の2階壁にある漆喰看板は、ちょうど戸袋くらいの大きさのものである。漆喰の縁飾りを付け、垂れ幕の形に塗った内側に「呉服 太物 諸油 雑貨 安田商店」と太いレリーフが施されている。垂れ幕の上には「大黒」がちょこんと座っている。制作時期は健治の生家にある「恵比須」と同じ頃であると思われる。

息子・正信さん（故人）は、左官であった父・健治の元で修業をしたが、弟子たちが親方に遠慮して技術を教えてくれず、雑用ばかりの仕事が若い彼にはおもしろくなかったのか、左官職人になるのをあきらめたようである。

しかし、正信さんの妻・イツ子さんは「生前の主人は『親父は腕のいい職人で、三島健治といえば知らない人はいなかった。』と父を誇りに思っていたようです」と語っていた。

「大黒」のアップ

漆喰看板の遠景

図柄の知恵袋 その12　大黒天（だいこくてん）

大黒天は梵語の摩訶伽羅の漢訳で、日本古来の神大国主命と習合されている。袋を肩から背負い打ちでの小槌を持つ姿はいかにも福徳神だが、もとはヒンズー教の破壊神で恐れられていた。

仏教に取り込まれ戦いや飲食の神になると、インドの諸大寺では、厨房に大黒天をまつれば何人の僧が訪れても食事に困らないと伝えられた。天台宗の開祖、最澄が日本に伝え、台所の神、福の神として信仰された。

●安楽寺の「龍」

所 在 地	大田市温泉津町
所 有 者	安楽寺
取付位置	本堂入母屋切妻壁
制 作 年	明治22年
制 作 者	山本 庄吉

遠景

ＪＲ温泉津駅の近くにある安楽寺は、妙好人（在家念仏者）の一人、浅原才市（1850～1932）ゆかりの寺として知られている。境内入口に才市の法悦句を刻んだ碑があり、数々の遺品も保存されている。

安楽寺の「龍」は、これまで調査した中では最大級である。本堂の北側妻壁の三角部分いっぱいに描かれた「龍」は、横幅８メートル、高さ３メートルはあろうかという巨大なものである。小浜の通りを歩く家並みの切れ間や厳島神社の境内からも遠望できるほどである。初めて見た時はそのスケールに思わず驚きの声をあげる人も多い。

「龍」が制作されたのは、明治22（1889）年。制作者は、石州左官の山本庄吉である。庄吉は安政４（1857）年に温泉津に生まれ、鳥取で修行を積んだ。これは彼が33歳の時の作品で、門徒ではなかったが、安楽寺の再建を祝い彫刻して奉納した。しかし、彼は後になって「満足のいく出来ではなかった。」と漏らしていたという。

よく見ると、天に向けようとした顔が少し酔っぱらったようなひょうきんな表情だ。石見の龍は神聖な印象を受けるが、このようなユーモラスな龍もいる。

この龍は100年の風雪にさらされているが、色の褪色が比較的少ない。北向きで潮風を直接受けなかったことが幸いしたとも考えられる。また、三島健治が手直ししたとの言い伝えもあり、今日の色の残り具合や鉄道開通という当時の一大事を考え合わせるとうなずけなくもない。

図柄の知恵袋 その13　波ウサギ（なみうさぎ）

「波ウサギ」という図柄のルーツは、「因幡の素兎（しろうさぎ）」の伝説からきたという説があるがよくわからない。ウサギはかつて聖獣とされ、またその生態から安産の象徴であり子孫繁栄を願って描かれたのかもしれない。

●渡辺家の「家紋に虎」

所 在 地　大田市長久町
所 有 者　渡辺 家
取付位置　土蔵
制 作 年　戦後
制 作 者　杉本 豊吉

「龍」の鏝文字

はじめは、遊んでいるとも思えるような表情の“猫”が俵にまとわり付き、ネズミにかじられないように、米蔵の番をしている図柄であると思い込んでいた。よく調べてみると、米俵に見えたのは、「九枚笹」という家紋だった。反対側には、「龍」という鏝文字の彫刻がある。

虎がまとわりつく構図は、竹や笹につきものであってみれば不思議ではない。酔っ払いを「トラ」というのは、酒を女房詞（ことば）でササと呼び、つきものの虎を洒落て、酔っ払った様子をいったものである。

作者・杉本豊吉は、実兄・熊谷藤三の依頼で熊谷家（現在は渡辺家）に他から移転した土蔵に、戦後鏝絵を取り付けた。豊吉は桶職人の修行をした後左官になり、朝鮮半島を経てサハリン（樺太）の日本人町で終戦を迎えている。一年のうち半年しか仕事ができない土地で、議員を務めるなど町の発展に貢献したという。彫刻はそこで習った。常時、20人くらいの職人を使っていたらしい。モルタルで作った二宮金次郎や聖徳太子半身像などの作品を見ると、どれも優しい柔和な顔立ちで豊吉の人柄が伝わってくるようだ。

●川島家の「松に鷹」

所 在 地　大田市大田町
所 有 者　川島 家
取付位置　2 階切妻壁
制 作 年　明治39年
制 作 者　不明

大田市の市街地、三瓶川に掛かる神田橋近くの川島呉服店の入母屋屋根の三角の壁に施された鏝絵は見上げるような位置にある。

明治40（1907）年に東宮殿下（大正天皇）が大田に行啓された時、随行の方の宿泊所に当てられたのが、前年に新築したばかりの川島家である。泊られた 2 階の部屋の柱や天井は総漆塗りであった。鏝絵はこのときに作られたものだ。ちなみに東宮殿下が泊まられた御便殿は、当時の農学校敷地（旧土木事務所跡）に建っていたが、老朽化と道路を通すために解体された。

「牡丹に唐獅子」

●井沼田家の「牡丹に唐獅子」「五三の桐に蝶」「つがいの鶴」

所 在 地　大田市仁摩町馬路
所 有 者　井沼田家
取付位置　天井中心飾り、6 帖間小壁
制 作 年　明治
制 作 者　井沼田 助四郎

「つがいの鶴」

「五三の桐に蝶」

長く続く美しい馬路の海岸線から国道 9 号に向かってＪＲの線路をまたぐと、馬路が生んだ天才的な左官松浦栄吉と並び称される左官・井沼田助四郎（1845～1929）の生家がある。

助四郎もまた彫刻を得意としていた。自宅の天井の中心飾りに「牡丹に唐獅子」と「五三の桐に蝶」。正面仏壇の上の小壁には「つがいの鶴」が彫刻されている。天井は漆喰の塗り天井で廻（まわ）り縁に当たる所には蛇腹（ジャバラ）が引いてある。

以前、助四郎の孫の嫁にあたるヨシエさんは、「鉄道が開通するまではもっと屋敷が大きかった。蚕を飼うようになって、天井がすすけてしまいましたけれど、以前はちゃんと色があってきれいでしたよ。」と昔を懐かしむように語ってくれた。

知恵袋 その4　蛇腹引き（じゃばらびき）

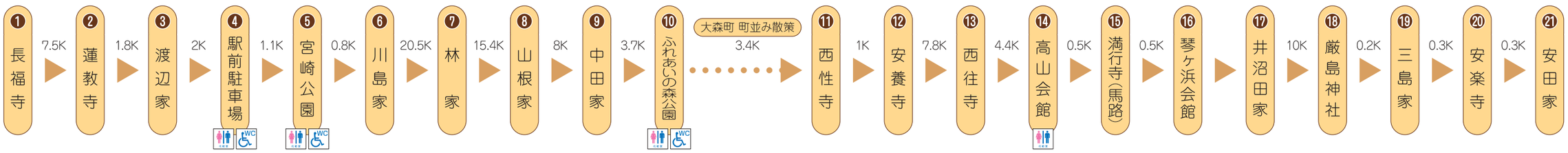
イギリスの左官技術で天井と壁の境の飾りのこと。漆喰を盛り上げた後、生乾きのうちに引き型と呼ばれる木や金属製の型を引いて装飾を施す。明治から昭和初期にかけ建てられた近代洋風建築に多く用いられていた。松浦栄吉は外務省の嘱託として上海で蛇腹の技術を習得し活躍している。

蛇腹の引き型
（浜田市･分石松雄さん作）

船原家の天井梁型
（大田市仁摩町馬路）

松浦家の天井飾り

VI 鏝絵めぐり コースとマップ



Ⅴ その他の石東地域の鏝絵

大田市

龍
大願寺（大田市大田町）
鐘楼門妻壁に施されたもの。
制作年代は明治、制作者は不明。

波ウサギ
法専寺（大田市鳥井町）
経蔵正面扉上部に施されたもの。制作年代は大正初め、制作者は石田左官。

蓮
西念寺（大田市温泉津町）
本堂入母屋に施されたもの。制作年は明治16年、制作者は不明。

龍
龍善寺（大田市仁摩町）
本堂内扁額に施されたもの。制作年は明治37年、制作者は河行清五郎。

唐獅子牡丹
龍善寺（大田市仁摩町）
本堂内扁額に施されたもの。制作年は明治44年、制作者は大門新作。

波ウサギ
願楽寺（大田市温泉津町）
経蔵まぐさに施されたもの。
制作年、制作者は不明。

美郷町

恵比須　山根家（美郷町吾郷）
道路の嵩上げで土蔵が解体され鏝絵は取り外して保存された。

二股大根　中原家（美郷町潮）
土蔵妻壁に施されたもの。
制作年、制作者は不明。

邑南町

双龍
満行寺（邑南町井原）
本堂妻壁に施されたもの。
制作年、制作者は不明。

川本町

おかめ
中垣家（川本町因原）
土蔵妻壁に施されたもの。
制作年、制作者は不明。

なお、調査については、全県をくまなく歩いたものではなく、今後、地域住民のみなさんの関心が高まり、新たな鏝絵情報が集まることを期待しています。

Ⅵ 鏝絵の材料

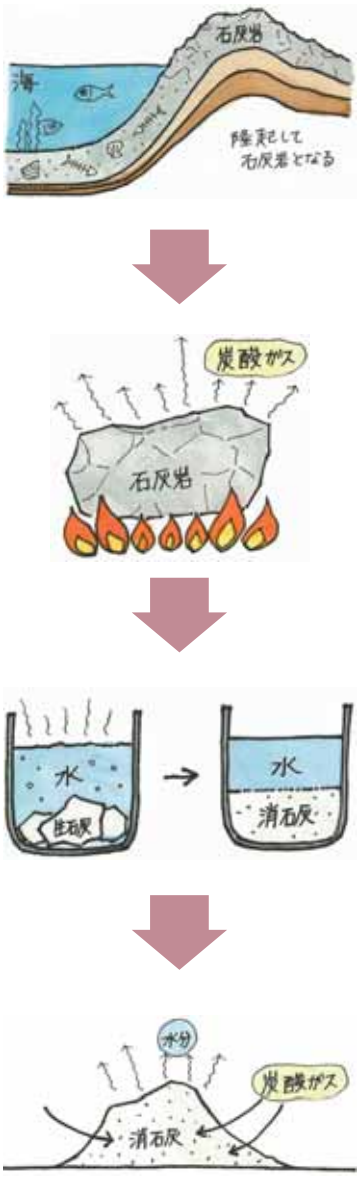
鏝絵は、前に述べたように左官が塗壁の材料である漆喰（しっくい）を使い、左官道具の鏝を用いて室内や外壁に施した漆喰彫刻のことを言う。漆喰に顔料を混ぜ着色（色漆喰）されている。

漆喰の主成分は、消石灰（しょうせっかい）からなる。消石灰は石灰岩などを焼いて出来た生石灰（せいせっかい）を 水と科学反応させ作られる。（下図参照）

本文『Ⅲ 大田市周辺の鏝絵』（17頁）では西往寺（仁摩町）の「安珍清姫」の一部分が剥がれ落ちた内容に触れているが、材料の漆喰に顔料だけを混ぜるのではなく、角又（つのまた）やふのりなどの海藻を煮詰めて作ったのりを加え、塗りつけに必要な保水と固着を計るために使用したりスサと呼ばれるわらや麻などの植物繊維を細かくして入れた。漆喰が乾いて収縮する時のひび割れを防止するために材料に混ぜられるのである。

伊豆の長八が名匠と言われているのは、鏝絵の芸術性の高さもさることながら漆喰というアルカリ性が強く顔料を変色させてしまう性質を熟知し、漆（うるし）や膠（にかわ）を使って色彩の脱色を押さえ、筆で自由に彩色する漆喰鏝絵と呼ばれる独特の技法を考案したことにある。

石灰岩から消石灰ができるまで



石灰岩（せっかいがん）

石灰岩はサンゴや貝類などの生物の殻（主成分は炭酸カルシウム、$CaCO_3$）が堆積して出来たもの。

生石灰（せいせっかい）

石灰岩（$CaCO_3$）を800～1200℃で焼くと石灰岩から熱によって炭酸ガスが放出し、石灰と分離して生石灰（酸化カルシウム、CaO）ができる。

$$CaCO_3 \longrightarrow CaO + CO_2$$

消石灰（しょうせっかい）

生石灰（CaO）を水中に入れると化学反応を起こして熱（100℃）を発生する。水に溶解して消石灰（水酸化カルシウム、$Ca(OH)_2$）となる。消石灰を取り出し、空気中にさらすと水分が蒸発して乾燥し空気中の炭酸ガスが入れ替わりに入る。

$$CaO + H_2O \longrightarrow Ca(OH)_2$$

石灰石（せっかいせき）

炭酸ガスの吸収による炭酸化（炭酸カルシウム、$CaCO_3$）によって硬化する。空気中にのみ硬化する性質（気硬性）を利用して壁の材料などに使われている。ふつう消石灰にのりやスサを入れ桐油等を入れて使うが、生石灰を使用することもある。

フレスコ画は生石灰を使う。ふれあいの森公園（本文13頁）の梅林さんの作品は、生石灰をベースに川砂を混ぜた石灰モルタルを塗ってキャンバスとなる壁にしている。

$$Ca(OH)_2 + CO_2 \longrightarrow CaCO_3 + H_2O$$

（イラスト：尾村七恵）

Ⅶ 鏝絵制作の手順（指導：松浦満幸さん）

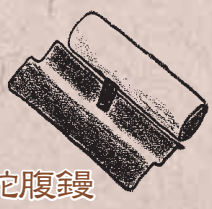
1 鏝絵がはずれないよう土台に穴をあけ、灰汁止めなどをおこなう。漆喰で下塗りをし、砂漆喰を塗る。

2 竹ひごを芯にして麻ひもを巻きつけたものを台に手の形になるよう取り付け、麻ひもをたらす。

3 指の部分に漆喰を下塗りし、砂漆喰を塗る。（麻ひもは手が開かないよう固定しておくため）

4 下塗りが乾かぬうちに砂漆喰を塗り乾いたら麻ひもを解く。さらに砂漆喰（中塗り）を塗って手の形にする。

5 色漆喰を塗る。鏝で押さえ、表面を磨く。椿の葉などで磨くとツヤが出る。



蛇腹鏝
蛇腹を引くために考えられた鏝。

柳葉鏝
幅の狭い壁を塗るのに最適。

鶴首鏝
鶴のような首からこの名がついた。彫刻など細かい仕事をするときに活躍する。

煉瓦鏝
煉瓦を割るのに使用。材料をすくうのにも使用する。

鏝は用途に合わせ、さまざまな形状がある。（高山会館所有）

Ⅷ 左官列伝

松浦 栄吉（まつうら えいきち／1858～1927）

安政５年、仁摩町馬路に生まれる。東京で左官職人として活躍していたとき、外務省の嘱託として領事館建設のため上海へ派遣された。そこで英国の左官技術である蛇腹（＝ジャバラ、壁と天井の境の飾り）を修得した。当時、国内にジャバラのできるものがいなかったので呼び戻され、大阪の郵政管理局の仕事でジャバラを披露した。その後、下関の山陽ホテル、福岡医大、福岡工科大などの仕事にも携わった。伝統的な左官技術に加え、彫刻や新しい技術も修得していることから“左官の神様”と呼ばれた。九州の直方駅前では、印半纏の男がズラリと並び、左官の神様を迎えたという。彼の菩提寺である大森町西性寺の経蔵に、見事な鳳凰や牡丹が彫刻されている。馬路の実家には、朝鮮の京城や大邱で手がけた建物の写真や、「1927.8.1」の日付の入った葬儀の写真が残されている。葬儀のアルバムを見ると、人力車の台数にも驚くが自動車が列をなしている光景にはさらに驚かされる。

松浦 栄太郎（まつうら えいたろう／1885～1945）

栄吉の長男。東京の父の元で、「一人前になるまでは、親子の縁を切る」と言われ、かなり厳しい修業をしていた。兵隊検査の通知を受けたときも、修業中の彼は考えに考えて、仕事に命を懸けようと中国の営口に逃亡した。しかし、大森の裁判所から度々呼び出しが来たらしい。一応のメドがついた26、7歳の頃、自首して浜田二十一連隊に入隊した。大正６年、軍艦常磐に徴募兵10人の一人として乗り組む。大正10年に撮った満期記念の写真が残されている。「松浦式人造」（洗い出し、研ぎ出し）を考案して左官業界の発展に尽くした。彼も彫刻を得意としており、ソウルの東洋拓殖株式会社の社屋に施した月桂樹の彫刻は人目を驚かすに十分だったという。ちなみに他の職人の日当が１円７、80銭のとき、彼は３円50銭もらっていた。彼には子がなかったので建築の設計士であった弟の健吉氏が馬路の家を継いだ。彼は、親方として多くの弟子を抱え育成していった。日本中行く先々の現場で、彼を慕う女性が数多くいたとか、浅草の某やくざの親分が、「松浦の組には手を出すんじゃない」といって一目置いていたというようなエピソードが伝わっている。

井沼田 助（兼）四郎（いぬまた すけしろう／1845～1929）

弘化２年に生まれる。前馬路大工屋、井沼田家に養子に入る。日露戦争のとき広島城跡に大本営が設けられ、彼は左官職人の一人として設営工事に参加し、その栄誉を担って立派な仕事を残した。松浦栄吉より14歳上であるが、同時代を生きた人であり、ともに腕利きの左官として高い評価を得ていた。ある現場で二人が一緒に仕事をすることになり、誰が発案したのか、二人は足場の上で同じ条件のもとにその腕を競うことになった。そして規定の仕事を仕上げたのはほとんど同時で引き分けであった。ただ、栄吉の方が一瞬早く足場から飛び降りたという。両者の腕が伯仲していたことを物語る。

兒島 嘉六（こじま かろく／1867～1944）

慶応３年、邇摩郡仁摩村（現大田市仁摩町）の商家の次男として生まれた。当時実家は本家筋の

「島屋」と肩を並べ商家「島木屋」として賑わっていた。彼は若い頃から彫刻に天賦の才を発揮した。明治18年（1885）に、仁摩町西往寺の本堂正面小壁に見事な「龍」の漆喰彫刻を師匠（あるいは兄弟子）の安田鹿市と共に残している。明治20年（1887）３月31日、鳥取県岩美郡宇部野村（今の国府町）の森田家の長女と養子縁組している。鳥取での足跡は、正運寺住職が残した彼の略歴によるしかないが、技能が優秀で人間的にも優れていたとされ、多くの旧家や寺など具体的な名前が記されている。森田家には晩年に縁側で孫を相手に作ったと思われる「七福神」や「唐獅子」などが残されている。仁摩町には「鷲」の石膏彫、「大黒」の焼き物など若い頃の作品が残されている。国府町の森田家は、既に役場の駐車場となっているが、当時の屋敷地にあった土蔵の「龍」は取り外され残された。嘉六が眠る墓所は、衣川や田代が広がり、生きてきた町を望む山の斜面にある。墓碑の正面には「達道明技居士」と刻まれている。

三島　健治（みしま　けんじ／1898～1967）

邇摩郡温泉津町（現大田市温泉津町）小浜で代々旅館業を営む家に長男として生まれる。八代目にあたる彼は家業を継がず、左官の道に進んでいる。叔父の三島伊作（作品が厳島神社に絵馬として奉納）について修業し、漆喰彫刻を学ぶ。旧満州で仕事をしていたこともあるが、主に東京で活躍した。墨田区に居を構え、親方として多くの弟子を抱えて、主に三井物産の仕事を請け負っていた。彫刻も得意で三井物産の重役宅などに施した。

寺本　元右衛門（てらもと　もとえもん／生没年不詳）

邇摩郡温泉津町（現大田市温泉津町）福波大字吉浦に生まれる。『温泉津むかしばなし』のなかに、「水を飲む龍」という題で名工「元さん」の話が載っている。

石見の高野山といわれる、高野寺（たかのじ）の経堂の壁に「しっくい」でつくられた龍があります。だれが見ても一目で名工の作とわかるほどのりっぱな龍です。

むかし、この龍が夜になると、毎晩、波積（はすみ）の岩龍寺滝へ水をのみに出るというのです。歩いたあとは作物はめちゃくちゃになるし、見たものはびっくりして腰をぬかしてしまうありさまでした。

寺はこまったあげく、龍の両方の目に大きなくぎをうってしまいました。それからというものは、水をのみに出なくなりました。

この龍の作者は吉浦の寺本元右衛門という名工だったといわれています。この元右衛門はのちに人にねたまれて、「いがなす」（毒草）を食べさせられて精神病にかかってしまいました。それからは吉浦の浜辺の西の端にある穴に住んで、あわれな一生をおくったということです。吉浦の人はこの穴を今でも「元の穴」と呼んでいます。

このむかしばなしにある「龍」は、昭和38年の豪雪で経堂もろとも倒壊してしまって残っていない。唯一、写真一枚が残されている。

実はこの話のなかにある「元さん」を見た人がいた。「私が子どもの頃に、元さんちゅう人がワーワー言いながら歩きょって怖かった。師匠より腕が立ったので、その女房に妬まれて毒を飲まされたげな」というショッキングな話は、今も昔も変わらない人間の性を感じさせる。

花田　末喜（はなだ すえき／生没年不詳）

明治42年頃、川本町三島に５人兄弟の３男として生まれる。長男以外はみんな大工や左官になった。父親も左官であった。川本町笹畑の城納（じょうなん）さんについて修業。川本町の鈩家に婿養子として入る。しかし、３人の娘ができてすぐ、20代半ばの若さで亡くなった。因原八幡宮の「龍」は彼が残した唯一の作品である。「乾くといけないので筵を掛けて作業した。兄は大工もできる器用な人だった」と、作業を手伝った３つ年下の弟は語る。

伊藤　末治（いとう すえじ／1896～1978）

明治29年、益田市横田町で、７人兄妹（男５人、女２人）の長男として生まれる。男兄弟は全員左官になった。左官職人の父の元で修業する。末治は几帳面な性格で手先が器用な上、絵も巧かった。そのため、彫刻にもその才を発揮し、益田市周辺には彼が手がけた作品が多く残っている。近くの守源寺に奉納されている龍の扁額には弟の乙市の名が入っているが、実際は末治が手伝ったものだという。末治は生涯横田の地で活躍し、日原や津和野など近隣の町へ自転車で出かけていった。向横田町や白上町に民家の土蔵に同じ作風の龍が壁面を飾っているが、何れも白上町在住の左官・岡崎忠隆さんが造ったもので、弟子の頃、末治の元へ仕事を終えてから漆喰を持って習いに行ったそうだ。末治が使っていた彫刻用の細工鏝も譲り受けている。末治の次女は子どもの頃には父の偉業を知る由もなかったが、横田町にある尾木家に施された「鯉の滝登り」の下絵を見せながら、左官の雛形集や数々の下絵が末治とともに土のなかで永遠の眠りについていることを語ってくれた。

槙坂　治義（まきさか はるよし／1903～1977）

温泉津町福波大字吉浦に生まれる。九州・飯塚で温泉津町福光出身の左官、寺敷六治の元で修業。彫刻を得意としていた師匠の指導で、絵が好きだった治義も彫刻をするようになった。馬路の左官、前田増太郎と仕事で朝鮮へ行ったこともある。妻子を吉浦に残し東京へ長い間行っていたが、還暦をすぎた昭和39年に故郷へ帰ってきて自宅を改築、居間の天井に漆喰彫刻を施した。吉浦の敬願寺の経蔵には治義の手による「龍」が彫刻されている。福光八幡宮には師匠である寺敷六治の作品が奉納されている。

前田　勝義（まえだ かつよし／1912～2002）

仁摩町馬路に生まれる。「兄弟、親戚もみんな大工だった。親父に大工になれと叱られたが、自分は重いものを担ぐのが嫌だったから左官になった。」と生前に語っている。鳥取の義兄に15歳で弟子入りし、３年の修行を積んだ後、山陰はもとより九州や遠く満州へ武者修行に出かけた。満州で松浦栄太郎の下で働いていたとき「お前は、人の下でずっと左官するつもりなら、さっさと荷物をまとめて帰れよ」といわれた。弟子入りした頃は、材料を作るところから徹底して仕込まれ、なかなか壁塗りをさせてもらえなかったようだ。「お陰であのときの経験が、後で役に立った」と後に回想している。戦後の混乱期に、36歳で単身上京、真面目な人柄と人一倍の努力と工夫で、大手建設会社から「左官工事なら前田」といわれるほどの信頼を勝ち取り、日本を代表する建物を次々と手がけてきた。代表的なものは、霞ヶ関ビルや帝国ホテルなどの初期の高層建築や、最高裁判所などを手がけ、超高層では住友ビルや京王プラザホテルなど、そして最後の仕事は池袋のサンシャ

イン60であった。かつて霞ヶ関ビルの工事で、コンクリート面のシゴキ、つまり補修材料としてセメントにパーライトを混ぜ合わせたものを考案した。この工法は、塗り厚が薄くて効果が大であることから、後に「竹中工法」と呼ばれ広く普及した。テレビでも勝義考案のこの工法が放映されたことがある。

勝義曰く「わしらは、上手なんかよう言わんから、腕で評価してもらう。ほかの職人は 8 時にカバンをぶら下げて来た。わしらは飯場に寝泊まりして、 6 時にはもう足場の上におった」彼は野丁場の左官で、彫刻とは縁がなかったが石州左官の気質をよく表している。勝義が退職するときには、勤めていた原田建塗工業の社員一同から次のような讃歌を贈られている。

一、ミキサーの音　轟々（ごうごう）と
　　技術に生きる　心意氣
　朝日に映える　超高層
　ビルの現場を　今日も征く
　　印は原田の　前田班

二、寒風酷暑　ものかわと
　　艱難辛苦　乗り越えて
　われら左官の　先覚者（パイオニア）
　　前田勝義　ここにあり
　その名は永遠（とわ）に　輝やかん

青木 道郎（あおき みちろう／1926～1980）

大正15年、益田市横田町に生まれる。父は伊藤末治の末弟、乙市（1900～1955）で、養子に入った青木家は後川を挟んだ向かい側にある。道郎は男 3 人、女 4 人の 7 人兄弟の長男。左官の父の元で修業する。父が若くして逝ったあと、弟子やら兄弟あわせて十数人いた大世帯を一人切り盛りしていった。道郎の若い頃の作品は恵美須神社拝殿に残る「龍」のほか、篠原家土蔵の「唐獅子」と「恵比須」、長谷川家土蔵の「龍」、藤井家主屋の「龍」、同家床の間の「扇に鶴と松」、村上家主屋の「松に鶴と亀」が確認されている。いずれも躍動的で勢いを感じる作品ばかりだ。道郎は弟子たちが独り立ちすると、市内の坂本建設に勤めている。坂本建設時代の弟子平川剛さんは、「仕事は見て盗んで覚えろと言われたが、要所要所ではちゃんと教えてくれた。優しい人だった」と回想する。平川さんが独り立ちし、土蔵の仕事を任されたとき、師匠に援助を申し出、手伝うという約束をしたまま亡くなった。平川さんの記憶にあるのは、「現場に入るたびに一年生だと思って望め」と言われた言葉である。

幸田　績（こうだ いさお／1919～）

大正 8 年 3 月、大田市五十猛町に生まれる。少年時代、家業の石炭運搬船に乗るが、船酔いしやすいこともあって断念。14才で叔父を頼って上京、弟子入りする。当時の左官業界のトップに位置する亀井組に所属。弟子入りの初仕事が、国会議事堂衆議院議員控え室の壁、天井だった。次いで昭和 9 年に明治生命館の 1 階営業の間の漆喰蛇腹天井を施工。当時から石州左官は重要な仕事を任されており、丸の内のビルのほとんどを手がけたとされる。昭和20年、 6 年半の徴兵を経て復員、戦後の初仕事は、日本銀行仙台支店。当時日当が100円のところ120円もらった。その後、師匠の叔父と原田建塗に移る。原田建塗では馬路出身の前田勝義と双璧をなすほど活躍した。最も多いときで50人の職人を引き連れた。直弟子は16人。講談社本館の内壁、皇居の東宮御所や新宮殿などが思い出に残ると語る。昭和61年に引退、帰郷する。※2007年 5 月88歳で逝去。

Ⅸ 石州左官の魂を伝える職人たち

品川　博 さん（しながわ ひろし／兵庫県加古川市在住）

1954年邑智郡瑞穂町（現邑南町）生まれ。15歳で故郷を離れ加古川の長兄の元で左官の修業をした。「左官アート」の世界へ踏み込んだのは20代後半からで、多くの左官職人が転廃業していく中で、本業が暇な時にセメントを家に持ち帰り擬木などを作り始めたのがきっかけだった。

左官アートへの関心は高い

品川さんの作品は、浮き彫りの鏝絵から立体的な彫塑まで幅広く、建築の装飾はもとより、植木鉢や花瓶などから、昆虫、動物まで及び、猿のような大きなものから地を這う蟻まで様々。セメントを彫刻に適した素材に工夫したことが緻密な細工を可能にしている。平成元年、鉄筋コンクリート造寺院では日本で最大という兵庫県加古郡播磨町の円満寺五重塔の完成に併せ、その一層目軒下欄間部分外周51メートルに四季を表現した鏝絵は、同県の技能顕功賞を受賞。その後、「天女」（明覚寺／邑南町）、「ハチとタンポポ」などを制作。平成17年度日本建築仕上学会学会賞を受賞。

「ハチとタンポポ」
美容院たんぽぽ（美郷町）

ほんものそっくりのヤドカリ

高井　昇 さん（たかい のぼる／松江市島根町在住）

1944年大原郡木次町（現雲南市木次町）生まれ。島根県立松江職業訓練所（現松江高等技術校）にて左官技術を習得後、市内の企業に左官として就職し、九州、大阪、北海道にも勤務した。1966（昭和41）年松江高等技術校左官科の指導員となる。その後、出雲や松江の高等技術校で在職者の講習会等の担当として県内左官の育成に熱心に関わってきた。

「鯉の滝登り」（額装）

2000（平成12）年に淡路島で開催された花博覧会では、澄田島根県知事の「石見には鏝絵がある」の一言から作ることになった「波ウサギ」を出品し、県内外で島根の鏝絵の存在を知らしめた功績は大きい。その後も品川さんや松浦さんを講師として招いて鏝絵講習会を実施し、県内の左官への鏝絵に対する関心を高めるきっかけづくりをしてきた。

「波ウサギ」
アクアス（浜田市久代町）

島根県を退職後も、2005（平成17）年秋に開催した「鏝絵サミットインしまね」の実行委員として関わるほか、県内の小中学校において鏝絵実習の指導を行っている。また、自らの作品制作のヒントを得るため、意欲的に先進地視察などを行い、自己研鑽をしている。

松浦 満幸 さん（まつうら みつゆき／大田市仁摩町在住）

1951年邇摩郡仁摩町（現大田市仁摩町）馬路生まれ。一級技能士。15歳で左官になり大阪に出て仕事を続ける。鏝絵は平成２年のＵターンを機に本格的に始める。本業の傍ら、馬路出身左官の優れた業績を蘇らせようと仲間と鏝絵制作に取り組むほか、職業訓練センターでの鏝絵実習や地元の子どもたち向けの総合学習の講師を行う。

「パンダ」仁摩保育所

制作過程を熱心に聞く見学者

松浦さんの得意とする図柄は、地域に伝えられる伝説を題材にしたものや、自分の手など身近なものが多い。本誌で紹介しているほかにも、仁摩保育所内に29個の動物、野菜、果物、魚などがあり、どれも思わず心温まる作風である。

「祭り」
（町のみんなで作った鏝絵）

森山 恵二 さん（もりやま けいじ／大田市大屋町在住）

1953年大田市大屋町生まれ。父親も左官で、15歳で叔父を頼って上阪し、町屋左官として修業した。十年後に帰郷し、市内の建設会社に勤める。仕事の傍ら漆喰彫塑やセメントアートを試みる。

町並み保存の仕事では、地区選定当初から関わり、特に伝統的な左官工事では実績を積んでいる。国の重要文化財に指定された大森町の熊谷家住宅の改修では左官工事の棟梁を務め、土壁や漆喰塗り、篭制作に貢献した。熊谷家は漆喰文化の認識を高め構成に伝え残していくための模範となる施設として、日本漆喰協会の平成18年度作品賞に選ばれた。

「鶴」

「牛と大黒」熊谷家（大田市大屋町）

熊谷家住宅の庭（大田市大森町）

また、同年、前大田市長の熊谷さんから、自宅の土蔵の修理の際に鏝絵を作るチャンスを得て、和牛繁殖農家である施主にちなんで「牛と大黒」の図柄を仕上げた。

X 他県の鏝絵の特徴と取り組み

大分県

大分県下にはおよそ1000点を超える鏝絵が散在している。なかでも宇佐市安心院町には明治から大正期にかけて作られた鏝絵が多数残されており、平成８年「大分県の鏝絵習俗」として国選択無形民俗文化財に指定されている。安心院町観光協会では、ボランティアガイド30数名が「心のもてなし」をモットーに鏝絵案内をしている。

「外法」
永田家（安心院町樽本）
大黒が寿老人の禿げ頭を散髪

■問合せ先　安心院観光協会
〒872－0521 大分県宇佐市安心院町下毛
Tel：0978－34－4839
http://www3.coara.or.jp/~ajmkk/

「猩々（しょうじょう）」
大久保家（安心院町木裳）

「ワイン・スッポン」
三原家（安心院町木裳）

「南極老人」
下園家（安心院町西衲）

静岡県

静岡県賀茂郡松崎町出身で鏝絵を芸術の域まで昇華させた左官の名工入江長八は、建物装飾から額縁、塑像、掛け軸にまで繊細な作品を残し、それらは伊豆の長八美術館や重要文化財岩科学校でみることができる。松崎町では平成12年度から全国漆喰鏝絵コンクールを実施するとともに９月開催の「長八まつり」では特別展や所蔵家屋巡り、鏝絵体験など鏝絵の普及に努めている。

■問合せ先　㈶松崎町振興公社
〒410－3696　静岡県賀茂郡松崎町宮内301－1
Tel：0558－42－1881　Fax：0558－42－1950
http://www.izu-matsuzaki.com/

「龍」

「近江のお兼」

「春暁の図」

富山県

鏝絵の名工竹内源造は富山県射水市三ケで明治19年に生まれた。昭和17年に亡くなるまで、250点余りの素晴しい鏝絵を残した。射水市（旧小杉町）には平成14年に「竹内源造記念館」ができて、全国の鏝絵愛好者が訪れるようになった。この記念館を核として富山県内の鏝絵愛好家が集まり「竹内源造記念館友の会」が結成され、鏝絵体験講座や現地視察が実施されている。

■問合せ先　竹内源造記念館
〒939－0351　富山県射水市戸破2289－1
Tel：0766－55－3288　Fax：0766－55－4574
http://www.genzou-world.net

「二十四孝大舜の図」
常国神社（高岡市）

「双龍（左）」
名越家（砺波市宮森新）

「白拍子」
佐藤家（富山市東岩瀬）

愛媛県

平成６年頃から「えひめ鏝絵の会」により鏝絵分布調査が始まり、県内には、東・中・南予に約900点が分布していることが判明した。絵柄は様々であるが、中でも南予地域に多く存在している。会では、各地の鏝絵のある民家解体にあたって、極力取り外し保存のボランティア活動を行っている。また、地域の鏝絵ガイドや鏝絵写真展などの依頼を受けている。

「寒暖計」
旧高岸家土蔵
（砥部町広田）

■問合せ先　岡崎　直司（えひめ鏝絵の会世話人）
〒799－3112　愛媛県伊予市上吾川22－5
Tel&Fax：089－983－4495

「鶏のつがい」
都築家（内子町小田）

「恵比須」
青野家（西条市旦ノ上）

「雲龍」
本芳我家（内子町）

見学をする時にはマナーを守りましょう

鰻絵めぐりのお約束事

鰻絵は個人や寺社等の所有物です。たった１人がマナーを守らなかったことで、その後の見学を断られるということもあります。所有者のみなさんの大切なものとして、また地域の貴重な宝として、マナーをよく守り、お互いが気持ちよく過ごせるように見学させていただきましょう。

◆見学をさせてもらう時には、あらかじめ所有者の方に、見学者の概要・日時・人数等を電話や手紙などで相談しましょう。

◆場所によっては足元の悪い状況もありますので、コースや天候に合わせた履物や服装等を選びましょう。

◆駐車する場合は、ご近所に迷惑とならないよう、あらかじめ駐車スペースを確認しておきましょう。

◆現地に到着したら、まず所有者の方にあいさつをしましょう。
また、ご近所の方にも積極的にあいさつをしましょう。
―― あいさつは人と人とをつなぐ大切な言葉だということを忘れずに！

◆写真は許可を得てから撮影するようにしましょう。
―― この手引きで紹介してある所は、基本的には見学の了解は得ていますが、その時の状況により撮影できない場合もあります。必ず一声かけてから行動しましょう。

◆見学中の飲食や喫煙はご遠慮ください。

◆トイレを使用する際は、必ず了解を得てからにしましょう。

◆大きな声や音を出さないようにしましょう。特に小さな子どもをお連れの場合は同伴者が気を配って見学するようにしましょう。

◆いろんな物にむやみに手を触れたり、勝手に内部に入らないようにしましょう。

◆見学後は、所有者の方にお礼を言って帰りましょう。

(o^o^o) (o^-^o) (o^o^o) (o^O^o) (o^.^o)

あ り が と う の気持ちを言葉にしよう！

まちなみ探偵事始

百年経っても落ちない壁を作ろうと壁を眺めているうち、ふと目に入った不思議なもの…それが島根の風土が育み、日本の近代建築の一翼を担った石州左官たちが、磨き上げた技と魂を吹き込んだ鏝絵だと気づくのにはそう時間はかかりませんでした。

「まちなみ探偵団」を結成してからこれまでに見つけた鏝絵は300点を超えました。庶民文化の結晶のひとつとも言える鏝絵の魅力と、その一つひとつにまつわる様々な出会いは、普段は見過ごしてしまいがちな身近な“たからもの”がわたしたちのまちにもあることを確信させてくれました。

十年余の歳月が流れる中で、メンバーによる新聞連載、ホームページの開設、全国鏝絵サミットの開催と、多くの支援者と様々な機会に恵まれ、私たちの小さな想いは今や大きな輪となって全国各地に広がっています。

本書は、島根県の石東地域における鏝絵に関心を持ち、地域住民や来訪者のみなさんに“わたしたちのたから”を伝えたいと思っていただいた方のために、当団体が受託した国土交通省の地域資源活用構想策定等支援調査事業の一環として作成するものです。

今の時代を生きる私たちが貴重な地域資源の存在に気づき、先人たちが築いた「ものづくり」のすばらしさを語り継ぐための一助としてご活用いただけると幸いです。

2007年3月

まちなみ探偵団　代表　福間祐子

■写　真
馬路の海（西村崇司撮影）
国会議事堂内：雑誌『キラリ』より提供
松浦栄吉が関わった建造物：松浦敬矩氏より提供
温泉津町のなまこ壁（今田善寿撮影）
他県の鏝絵：各問い合せ先より提供

■引用・参考文献
『馬路教育史』（馬路教育史編纂委員会）
『月刊左官教室』（黒潮社）
『伊豆長八作品集』（財団法人 松崎町振興公社）
『上方左官物語』（大阪府左官工業組合）
『講演資料「壁画のシルクロード」』（高橋啓司／1995年）
『土壁・左官の仕事と技術』（佐藤嘉一郎・佐藤ひろゆき共著／学芸出版社）
『鏝絵ー消えゆく左官職人の技』（藤田洋三著／小学館）
『鏝絵放浪記』（藤田洋三著／石風社）
漆喰材料：田川産業㈱HPより
なまこ壁：松崎町役場HPより
図柄の由来：『日本未確認生物事典』（柏書房）、『日本語大辞典』（講談社）、『広辞苑』（岩波書店）、『大辞泉』（小学館）、『大辞林』（三省堂）

鏝絵めぐりの手引き～石東地域編～

2007年3月発行　発行・編集／まちなみ探偵団　URL／http://www.kotenami.jp/